

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K03355

研究課題名（和文）縦断研究と介入研究による児童の社会コンピテンスが心理適応に及ぼす影響の検討

研究課題名（英文）Social competencies predict students' psychological well-being

研究代表者

大谷 和夫（Ohtani, Kazuhiro）

北海道大学・教育学研究院・講師

研究者番号：20609680

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、縦断調査と介入研究により児童の社会的コンピテンスと心理適応・動機づけの関連について明らかにするため3つの研究を行った。研究1では縦断調査のメタ分析研究を行い向社会的行動と友人からの受容との相互的關係を検討した。11件の効果量を統合したところ、小学生を対象にした研究において向社会的行動と友人からの受容に正の相互的關係があることが明らかとなった。研究2では、縦断調査を行い2時点分のデータを分析した。具体的には、友人との学習と動機づけの相互的關係、向社会的行動と共感性の相互的關係を検討した。研究3では、学級を対象とした援助要請の出し方に関する授業を実施する介入研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では社会的コンピテンスと心理適応の關係を検討するために、縦断調査ならびに介入研究を実施した。これまでの日本における教育心理学研究の多くは、1時点の測定における推論に基づいているため、本研究は因果推論という側面において学術的に貴重なデータを提供しているといえる。さらに、児童生徒の適応や動機づけを考える上で、社会性やそれらを育む社会的環境の重要性に言及している点においては教育実践上の示唆を持つと考えられる。特に介入研究では、友人間で相互に助け合うことを支援する教育プログラムを行ったことから、教室場面での適応の問題に対して具体的な改善の方法を提案しており、一定の社会的意義を有すると言える。

研究成果の概要（英文）：In this project, we conducted three studies to elucidate the relationship between children's social competence and psychological adjustment/motivation through longitudinal surveys and intervention studies. Study 1 conducted a meta-analysis of longitudinal surveys and examined the mutual relationship between prosocial behavior and peer acceptance. Integrating data from 11 studies targeting elementary school students, it became evident that there is a positive mutual relationship between prosocial behavior and peer acceptance. In Study 2, a longitudinal survey was conducted, analyzing data from two points in time. Specifically, it investigated the mutual relationship between learning with friends and motivation, as well as the mutual relationship between prosocial behavior and empathy. Study 3 implemented an intervention study focused on help-seeking in a classroom setting.

研究分野：教育心理学

キーワード：社会コンピテンス 向社会的行動 心理適応 動機づけ 援助要請 中学生 小学生

1. 研究開始当初の背景

近年、教育現場では児童・生徒のいじめや抑うつ、さらには学習意欲の低下など深刻な問題を抱えている。こうした課題には学習への動機づけや社会・対人関係への心理適応を促進することを目的とした、予防・対応が必要であると考えられる。その切り口は多様であるが、申請者らはこれまでの科研費研究において、学級環境に着目した研究を行ってきた(H24~26 若手B; H28~R1 若手B)。そこでは、良好な学級の心理的環境が、ポジティブな影響を与えることを明らかにした。より具体的には、相互尊敬があり、困っている人を助けることが強調される(あるいは助けを求めやすい)向社会的な学級環境が望ましいのである。また、それらに加えて、児童の社会的コンピテンスに関する要因(e.g., 援助要請傾向、向社会的傾向)も心理適応や動機づけに関連することが知られている(Wentzel et al., 2012)。申請者の研究でも学習の援助提供等の相互交流は、児童の学習動機づけと関連していた(大谷ら, 2016)。このように児童の社会的文脈や社会的コンピテンスに関する要因が心理適応や動機づけを考えるうえで重要だといえる。

一方、申請者のこれまでの研究および、日本における教育心理学研究の多くは、こうした社会的な要因が動機づけおよび心理適応に及ぼす影響について 1 時点の測定における推論に基づいている。1 時点の調査研究では科学的には因果関係に言及できないため、エビデンスレベルの高い研究を行う必要がある。これに加えて教育実践上においても、困難を抱えた際に援助要請を行うよう促すことが重要であるとされているものの、実証的な知見は少ない。これらの課題解決のために、本研究では縦断調査ならびに介入研究を実施することにより、学級環境が社会的コンピテンスを介して適応・動機づけに影響を与えていることを実証し、より教育実践に「生きる」教育学的知見の生成を目的とする。このことから特に、生態学的妥当性の高い、縦断調査および学校現場での介入研究が求められている。実際に児童の社会性に関する要因(e.g., 援助要請傾向)が児童の心理適応や動機づけなどに及ぼす影響を調べることは研究のみならず教育実践上重要な意味をもつ。

2. 研究の目的

本研究では、学級の心理的環境 社会的コンピテンス 心理適応および動機づけのモデルを明らかにする。本研究では縦断調査と介入研究により以下の 2 つの研究、縦断研究と介入研究を行う。1. 縦断研究では、社会コンピテンスから心理適応の関係を複数の時点で収集することを目的とする。

2. 介入研究では、援助要請などを求めやすい雰囲気醸成する学級ベースの介入を行う。介入実施による、社会コンピテンスおよび心理適応への影響を包括的に調べる。以上縦断研究と介入研究を組み合わせ、児童・生徒の社会コンピテンスと適応の関係について検証する。

なお、研究当初、縦断研究は初年度から実施する予定であったが、コロナウイルス感染症の拡大により一斉休校や活動自粛など社会生活に激変が生じ、研究計画に大幅な変更を余儀なくされた(実施時期の後ろ倒しとそれによる縮小)。その為、縦断研究の一環として、既存の縦断研究のデータをメタアナリシスにより統合することで縦断研究の一部を補完することとした。

3. 研究の方法

研究 1. メタアナリシスによる向社会的行動と友人からの受容の相互的關係

学校場面において社会的コンピテンスが適応を予測する背景には、友人からの受容が大きく関わる。本研究では、向社会的行動を社会的コンピテンスの一つの側面として捉え、友人からの受容との関係について検討した。2020 年 9 月までに出版されている両者の関係を縦断的に扱った論文に対して複数のデータベース(PsychINFO, Web of Science)を用いて検索した。英文で記載された査読付き論文を対象としたが、PsychINFO については博士論文の検索結果も掲載されている。検索語の組み合わせは以下の通りである。

(“pro-social behavior*” OR “prosocial behavior*”) AND (“peer acceptance” OR “nomination*” OR “social preference”) AND (“longitudinal” OR “cross-lagged”) AND (“adolescent*” OR “child*”)

結果、81 件の論文がヒットした。アブストラクトに目を通すと 50 件が無関係であり、最終的に 9 本の論文を採用した。なお、2 時点 2 変数のデータで交差遅延モデルを用いるため、合計で 6 個の相関が必要となる。研究によっては 6 つのうち一部しか報告されていないものも含む。

研究 2 - A 友人との学習活動と動機づけの相互的關係

縦断調査の 2 時点分のデータを用い、友人活動と動機づけの相互的關係について検討した。

調査対象者と質問紙 岐阜県内の公立中学校 2 校の生徒 617 名。7 月と 12 月の 5 か月間隔で 2 回の調査を実施し対応の取れた者を対象とした。相互学習 岡田(2008)の友人との学習活動尺度のなかの、相互学習の下位尺度 5 項目を使用した(例: わからない問題を一緒に考えたり調べたりする)。自己効力感 伊藤・神藤(2003)の 4 項目を使用した。興味 3 教科(国語, 数学, 英語)について興味を尋ねる 2 項目(Kovas et al., 2015)を使用した。

研究 2-B 友人への向社会的行動と共感性の相互的關係

本研究では向社会的行動を表出・非表出の2側面(山村・中谷, 2023)に分類したうえで、共感性や援助効力感など、従来から関連が指摘されている諸変数がどのように影響を及ぼしているかを検討する。

研究協力者 公立中学校2校に通う729名の中学生(1年生367名、2年生360名、不明2名)。このうち2時点での照合がとれ、データに欠損のない612名(男子270名、女子309名、その他・答えたくない33名)を分析対象とした。

調査項目 学年、クラス、自認する性の記入欄に続いて、向社会的行動8項目4件法、共感性10項目4件法、友人を援助することに対する自己効力感5項目4件法、友達からのソーシャルサポート知覚3項目4件法への回答を求めた。

研究 3 援助要請の出し方に関する介入研究

本研究では援助要請について介入を行う。援助要請を行うことを個人の問題に帰属するのではなく、それを可能にするクラス環境や仲間関係に注目し、生徒同士で話の聴き方や声かけの方法について体験的に学び、友人間における相互援助を支援することが、援助要請行動の促進に繋がると考える。授業は、ストレスに関する学習と相談することへの不安や抵抗を取り上げた上で、クラスメイトからの働きかけを体験、促進することを主たる目的とした相互援助型プログラム(reciprocal help)を実施した。また、従来、こうした援助要請の介入にはストレスマネジメント型のプログラムが実施されることが多い。このことから本プログラムとストレスマネジメント型のプログラムを比較する。さらに本研究では、教育的な倫理に配慮しつつプログラムの有効性を検証するため、待機群(統制群)を設けた。

参加者 公立中学校に在籍する1年生3学級計102名(男子52名 女子50名)がプログラムに参加した。待機群は実験群の介入が終わった後、相互援助型プログラムを受講した。

効果測定 また効果測定のために3時点で以下の尺度への回答を求めた:Time 1 開始前(10月)、Time2 開始直後(12月)、Time3 待機群への介入後(2月)。被援助志向性尺度(山村, 2017)10項目、抑うつ尺度(並川ら, 2011)、友人援助自己効力感(King et al., 2011)を参考に作成した。

4. 研究成果

研究 1 メタアナリシスによる向社会的行動と友人からの受容の相互的關係

全体で9本の論文に含まれる、11の研究結果を統合した。結果、向社会的行動と友人からの受容双方の交差遅延効果は認められなかった。

一方、学校段階別で検討したところ、向社会的行動から友人からの受容、友人から向社会的行動への交差遅延効果は小学生でのみ確認された。向社会的行動や友人を受容することは、特に小学校において教室などで強調されることが多いため、このような結果が得られた可能性がある。

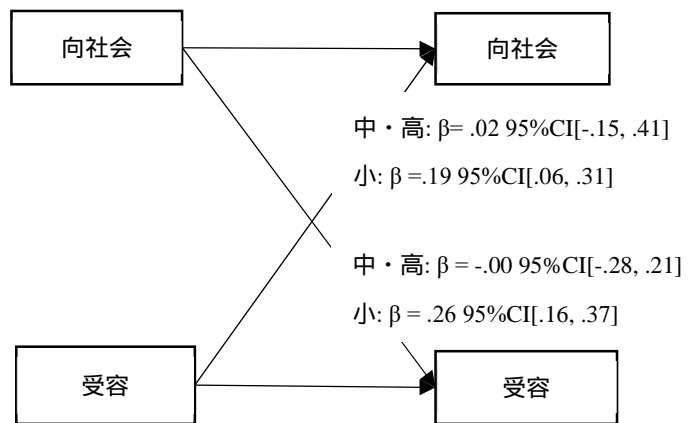


図1 メタ分析の結果

研究 2 - A

興味分析には教科ごとの2項目平均から1つの潜在変数を推定するパーセリングを行った。その他の変数は項目から潜在変数を推定した構造方程式モデルをあてはめた。時点間で同じ項目の因子負荷量と誤差分散には等値制約を置いたモデルを採用し、交差遅延モデルをあてはめたところ良好な適合度を示した(CFI = .98, RMSEA = .03)。交差遅延効果について、興味から自己効力感(.29, $p = .007$)、自己効力感から興味(.23, $p = .03$)、そして相互学習から興味(.13, $p = .045$)へ有意な正の値が確認された。

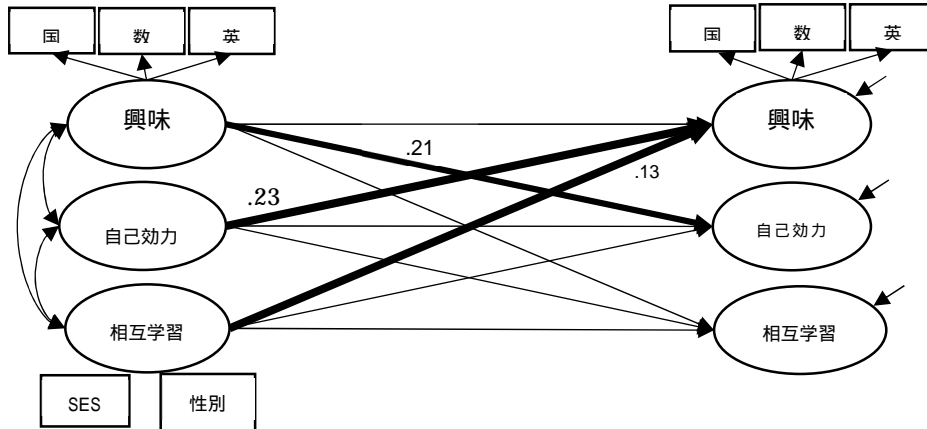


図2 友人との学習活動と動機づけの相互的關係

研究2 - B

心理尺度について下位尺度ごとに項目平均を算出した。学年差はすべての変数において2時点ともみられなかった。人数の少なかった「その他の性」を除いた性差(男女差)を検討したところ、すべての変数で有意な差が見られた。いずれでも男子より女子の得点が高かった。

飽和モデルでの交差遅延モデルの検証を行った。2種類の向社会的行動は、認知的共感性と友人への援助効力感から生起することが示され、さらに表出的行動の生起頻度が高いと、非表出的行動の頻度も高まることが示唆された。一方、情動的共感性から有意なパスは確認されなかった。

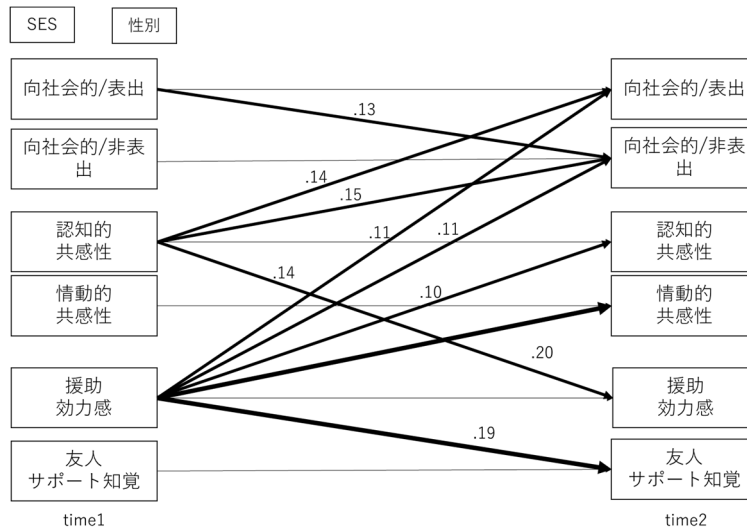


図3 向社会的行動と社会コンピテンスの相互的關係

研究3

2要因3水準(3群×3時点)の混合計画の分散分析を行った。全ての指標において、有意な群の効果は確認されなかった。2要因の交互作用は友人援助自己効力感で確認された(図4)。検定の結果、時点2と3の間での待機群の値の上昇が有意であった。待機群においては、相互援助の介入を時点2と3の間で行っている。

各群の平均値レベルでの推移をみると、統計的に有意な値ではないものの、相互援助群は介入後に効力感が上昇し、維持されている。同様に統計的に有意ではないが、抑うつ症状においても、介入後に抑うつ得点がかかる傾向が見える(図5)。

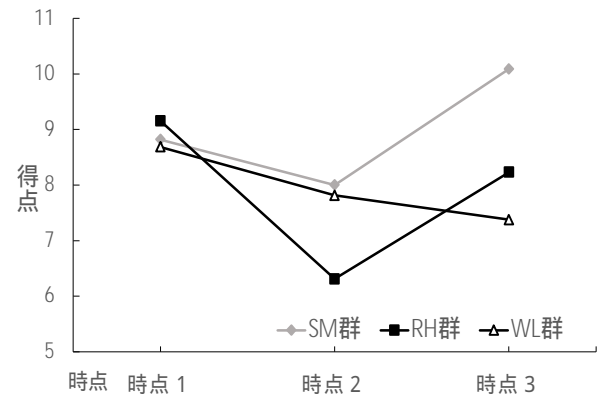
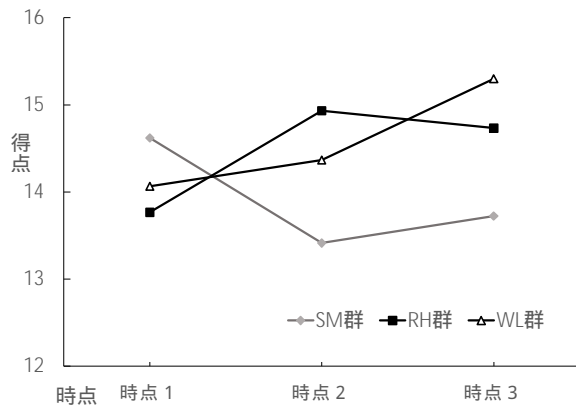


図5 群と時点の効果 注．SM=ストレスマネジメント、RH=相互援助、WL = 待機群

まとめ

本研究は、学級の心理的環境 社会的コンピテンス 心理適応の関係について、複数の研究を実施することで包括的に検証した。学級の心理的環境の影響については、学級の成員同士の相互援助を促す介入研究を行うことで検証した(研究3)。社会的コンピテンスと心理適応の関係については、縦断研究(研究1, 研究2)を行った。社会的コンピテンスと適応は密接に結びついていることが分かり、特に友人と学習することが興味に結びつくことが分かった(研究2-A)。また、こうした社会的コンピテンスのうち、困っている人を助けることができるという、援助自己効力感は向社会的行動を促すことが示された(研究2-B)。なお、小学生では特に向社会的行動をとることで仲間から受け入れられやすくなる(研究1)。介入研究では、学級環境に介入することで、社会的コンピテンスや適応を改善させるべく、学級の成員同士で相互援助を促すプログラムを実施した。結果、明確な効果は示されなかったものの、プログラムを実施することで、援助自己効力感が高められる可能性が示された。今後は、プログラムの改良を行うと共に追試で効果を検証していくことが求められる。

引用文献

- 伊藤崇達・神藤貴昭(2003).中学生自己動機づけ方略尺度の作成,心理学研究, 74, 209-217.
- 並川努・谷伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根 愛・野口裕之・辻井正次(2011). Birlleson 自己記入式抑うつ評価尺度(DSRS-C)短縮版の作成 精神医学, 53, 489-496.
- 大谷和夫・岡田涼・中谷素之・伊藤崇達(2016). 学級における社会的目標構造と学習動機づけの関連 ——友人との相互学習を媒介したモデルの検討—— 教育心理学研究, 64, 477-491.
- 岡田涼(2008). 友人との学習活動における自律的な動機づけの役割に関する研究 教育心理学研究, 56, 14-22.
- Wentzel, K. R., Donlan, A., & Morrison, D. (2012). Peer relationships and social motivational processes. In A. M. Ryan & G. W. Ladd (Eds.), Peer relationships and adjustment at school (pp. 79-105). IAP Information Age Publishing.
- 山村麻予(2017). 葛藤場面における向社会的行動方略の発達の变化 : 小学生と大学生の比較から 人間環境学研究 15, 9-15.
- 山村麻予・中谷素之(2023). 児童期における表出的・非表出的向社会的行動に関する認知 : 発達の視点から 発達心理学研究 34, 219-229.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Ohtani, K., Tamura, A., Sakaki, M., Murayama, K., Ishikawa, S., Ishii, R., Nakazato, N., Suzuki, T., & Tanaka, A.	4. 巻 70
2. 論文標題 Parental perception matters: Reciprocal relations between adolescents' depressive symptoms and parental perceptions.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Counseling Psychology	6. 最初と最後の頁 103-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1037/cou0000632	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Ohtani Kazuhiro, Yamamura Asayo	4. 巻 -
2. 論文標題 Impact of Teachers' Language Expression and Message Valence when Conveying Classroom Compliance Instructions	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jpr.12396	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 江畑慎吾、松本拓真、山村麻予、大谷和大	4. 巻 -
2. 論文標題 中学生を対象とした SOS の出し方教育の実践と効果	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 学校心理学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山村 麻予、中谷 素之	4. 巻 34
2. 論文標題 児童期における表出的・非表出的向社会的行動に関する認知：発達の視点から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 219～229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11201/jjdp.34.219	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大谷和大、小林慧
2. 発表標題 向社会的行動は友人からの受容を促進するのか：縦断データのメタ分析による検討
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大谷和大・岡田涼・山口洋介・石井僚
2. 発表標題 学習の価値づけが成績を高めるのか、成績が良いから価値づけるのか？メタ分析の交差遅延モデルによる検討
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大谷和大
2. 発表標題 縦断調査のメタアナリシス
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山村麻予・松本拓真・鈴木修斗・大谷和大
2. 発表標題 中学生における友人への向社会的行動
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大谷和大・山村麻予・鈴木修斗・松本拓真
2. 発表標題 友人との学習活動と動機づけの相互的關係
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大谷和大・稲垣 勉・太田 正義・加藤 弘通
2. 発表標題 学業エンゲージメントと友人關係の相互的關係
3. 学会等名 日本心理学会87回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 大坊郁夫（編）大谷和大（第7章「発達」p69-79を担当）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 194
3. 書名 心理学概論：Well-beingな生き方を学ぶ心理学	

1. 著者名 藤原 和政、谷口 弘一、藤原 健志、大内 晶子、金重 利典、谷口 康祐、石井 僚、川俣 理恵、村上 達也、大谷 和大、西村 多久磨、鈴木 雅之、福住 紀明、野中 陽一朗	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 296
3. 書名 学校現場で役立つ 教育心理学	

1. 著者名 大谷和大	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 222
3. 書名 心理学概論 (担当箇所: 第9章 教育と学校 学習と心理適応を支える)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松本 拓真 (Matsumoto Takuma) (50805489)	岐阜大学・教育学部・准教授 (13701)	
研究分担者	山村 麻予 (Yamamura Asayo) (70745190)	関西福祉科学大学・健康福祉学部・准教授 (34431)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------